愛獣―AIJU―

布袋しぐれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
愛獣―ＡＩＪＵ―

【Ｎコード】
Ｎ２５３８ＢＡ

【作者名】
布袋しぐれ

【あらすじ】
違法商売、そう銘打つ、その秘密の花園で。耽美なる行為にその身を任せ、ただ夢を売る人間がいた。
人々は彼ら、彼女らを鼻先で笑いながらそれでも、縋る。
――――・・・今日は沢山あげるからね、チップは弾む。
何でも欲しいものは揃っているのに、ゴージャスに幾ら纏ったって、この飢えはきっと癒えない。
どこで生まれて、どこで育ってもいいじゃないか。関係ないから。
色町に咲く、孤独で甘美で、渇いた花たち。

布袋しぐれ、渾身の力作。夜の街を舞台に繰り広げられる、耽美なるも寂しげな物語。私の今まで培ってきた表現力も何もかも、このストーリーに遠慮なくつぎ込んでいきます。どうか、このギリギリに最高に美しく汚い話を愉しんでください。

プロローグ

この町は汚い。けれど、落ちては戻れない。二度と羽ばたけない、失墜の楽園。

愛に飢えるなんて戯言のように。
もう飢えない人などいないんだろう。渇いた花、干乾びた耽美な夢で噎せ返るほど苦しい色町。昔からあった、違法商売。
夢を売って夢を買って。腐ったこんな現実に抗うみたいに。楽園に落ちた蝶たち、蠢く欲望のままに。汚らわしくも、美しく。
綺麗なブランドのショーウィンドー。もう閉店しかけのお店で、あなた名義のカードで欲しいもの全て。
――――・・・全く、悪い子だね、お前は。わたしにどれほど買えというのか。
――――・・・私のこと好きなくせにそんなことを言えるの？
――――・・・はは っ。全くだ、すまないよ、さあ気の済むまでお選び。
――――・・・後でちゃんと愉しませてあげる。
鼻なんかで笑う。汚らわしい笑い方、もう随分嫌気が差しているのよ。代価は高いわ。
売って買われて、与えられたダラー、ウォン、元、円、ユーロそのときだけ、あなたの玩具。愛玩具らしく、愛おしく艶かしく。あなたに与えられる夢を、この身体だけで。そういっときの落ちた天女みたいに。抜け出せない楽園へ導いてあげる。

この運命が憎いとも、身体についているこの分身が憎いとも。一度も思ったことがないわけじゃない。金には飢えない。愛には飢えても。溢れるほどの寂しい人たちは恵みを落としていく。

愛欲に乱れた、汚い金を。ゴールドで飾られた虚飾の女たち。寂しいこの上、夜伽の誘い。今宵は弾むと、上品そうなマダム。また重たい腰を上げて。ブランドで飾られた全身を、重たげに動かして。

――――――・・・あなたはとても綺麗な顔立ちね、どこの生まれなの。

必ずそう聞く。だから俺は答えてやる。今宵だけの関係であるから。

――――――・・・アジアの生まれです。

インディアン訛りの英語で。そう素っ気無く答える。関係ないだろう、どこの生まれだって。具体的に答えれば、チップは弾むかい。

長身に纏った、このブランドもすべて貢物。雇い主の好意。良く稼ぐ金づるだよって。俺はこの生き方しか知らない。苦しいなんて一度もきっと思ったことは無い。ただ可笑しい。面白い。俺の上で、欲望に乱れて、汚く散る花が可笑しい。

愚かだよ、全くお前たちは。

綺麗に纏っても、身体の奥から湧き出るこんな黒い感情に支配されてるなんてな。

この色町の一番売れっ子で。この色町で、一番飢えている人間。

ラグジュアリーに、ゴージャスに纏っても、あふれ出す飢えは拭えない。

男娼婦

その色町に捨てられたのはいつの日だったか。ただ、言葉の通じない町で、ひとりぼっち。救ってくれた男は、名前をヨセフとか言い、俺を育てた。

歳を重ねるにつれて、その正体を知った。この変な町でその、変な行為を売る男だと、理解するまでそう時間は掛からなかった。

俺の隣はいつも香水くさい、妙な男たちが行き交う。赤いタイトなズボンに、上品な黒いジャケット、そして嘘くさいまでにキラキラした、アクセサリーを身に纏った男もいた。その男は、自らをゲイと名乗っていたっけ

今となっては、まんまの名前に驚くだけだけれど。

幼少期の記憶も何もないのは幸いだと思う。きっとあったら、もっと苦しんでた。俺は、身の上を呪っただろう。よかったんだ、これで何も知らなくて。

俺の口付ける女たちの目は、まるで野獣のように飢えている。求めている、俺を必死に。ヒクついて、ただ。

そんな女たちに、与えるものを与えて。俺は莫大な肥やしを得る。規定の料金に、チップ。時には、数十万くらいだし、時には数千万のときもある。可笑しいくらい舞い込んでくるその金額は、俺の感覚を少しづつ、世間からずらしていった。

俺の身体には、いつの間にか美しいくらいの筋肉と、なじみの女の香水の匂いを纏っていた。醜さと、美しさは紙一重だなと、電波の悪いテレビに映る、綺麗な人間に思う。でも結局はこいつらも欲望を纏った、あいつらと同じ生き物。

夜になったら、美しいも綺麗もあったもんじゃない。結局そんなもんだ、と。俺にヨセフが言ったのを思い出した。

あの男は良くも悪くも俺から、綺麗さっぱり、希望にも似た部分を摘み取っていった。

「スンヒ」
「はい」
「お客さんだ、いつもの」
「はい」
俺は狭く、ちっぽけな部屋で、溢れんばかりの高級ブランドの中からお決まりの組み合わせを選ぶ。
黒くタイトで上品なズボンに、少しダークに赤みがかったジャケット。肩パットが思った以上に邪魔で、これは重たが、あの女のお気に入りだ。俺に着る事を強いる。そして、それにあわせて、水色のような青のような、中途半端なシャツをセレクトする。品良くまとまった、黒い蝶ネクタイをしてしまえば、あっという間に仕上がる。今宵の客に合わせた、最高の組み合わせ。
ロビーに出て行くと、女は夜だというのにかけていたサングラスに手をかけ、微笑む。
「スンヒ、相変わらず良く似合ってる・・・」
「ありがとうございます」
「マスター、スンヒの健康状態は?」
「何の病気にもかかってないさ、まだ。綺麗なまんまだよ」
毎週金曜は、病院で検査を徹底的に受けさせられえる。まるで飼い犬のように。性病だの、なんだのって。詳しく。
「ありがとう、じゃあ行こうか、スンヒ」
「はい、ミス・ロゼッタ」
「ふふっ・・・長くなると思うわ・・・チップはつけとくから・・・明日の午前四時までには必ず返すわね、マスター」
「マダムなら御気になさらずに、さ、スンヒ」
「行ってきます」
マスターと呼ばれる、ヨセフの顔が悦びに満ちる。そう、この客は大層な大金を落としていく。一週間前だったか。確か、この女は五百万をチップに持たせた。
自慢じゃないが、俺だってそこそこ上のほうだ。基本料金だって

安くない。確か、円に換算すると、五十万はくだらないはずだ。
金を落していく、上客向けの俺の料金。それに手が届くのはお馴染みの連中しかいない。少し、年増の、上品で悲しげな女たち。綺麗でも、この女たちには別の綺麗さが漂っている。哀愁から感じる、寂しいがまでの愛欲。それに埋もれた女たちは、共通に独特の雰囲気を発していた。
全身からにおう、香水のにおいに噎せ返りそうになった。気分がやはり、少し悪い。幾度嗅いでも、この匂いだけには慣れない。
「どうしたの？」
「いえ・・・」
「じゃあ・・・今日は中華を食べてからにしましょ。久しぶりに中華食べたくなっちゃった」
「はい、構いませんよ」
「どこか美味しいところ、知らない？」
「少し遠いのですが、チーパオが美味しいと聞いています」
「じゃあ、そこにするわ」
「タクシーを呼んできます」
手を挙げて、タクシーを呼ぶ。
いつもの夜が始まるのだ。
食事やら買い物やらをして、いつもの床につく。甘い夢に酔わせて、そのまま大量のチップを貰い受けて、俺は帰る。
慣れた手つきで、慣れた手順で。俺はそれをずっと繰り返していた。面白くも無い、この日常を。
俺はこの町で育って、ついに２２を迎えてしまった。こんな、面白くもない町で。

娼婦

その瞳を大きく見せる為だけの、黒のコンタクトレンズをはめいれる。綺麗に目の中に色をとどめて。私の顔を美しく変える。

昨日の客に強請った、新しいコスメ。別に欲しかったわけじゃないけれど、何となく気になって手にとってみたら。気がついたら、その客は私に差し出した。『君にあげよう。良く似合いそうだから』葉巻で濁った汚い歯を覗かせて、客はペラペラ良く喋る。仕方ないから私は微笑んで、ありがとうって。

赤と白しかない、可笑しなチェスみたいなこの部屋は私の唯一の部屋。それでいてただの、待機室。

いつものように、土曜の検査を受けて何も病気のないことを記した、ただの紙切れ一枚をマスターに差し出したら、マスターは満足げに笑った。そうして私にただの配給品でしかない、新しくお洒落なランジェリーを差し出す。

男の癖に妙にセンスがいい。やっぱり男（マスター）、オネエか何かなんだろうか。そんな疑いを持ちつつも、二階への階段を上がっていった。

部屋でごろりと、ベッドにダイブして今に至る。

部屋にいつも響いているのは、私がまだ満たされていた時代の音楽。

ここに来る前、私は日を浴びて、歌い踊る。そういう人間だった。私が歌えば、たちまちランキングは私が1位を占めていた。

ここに来る前に知った事実。私はただの養女であったということ。あの家の養女だった。

あの日、売り飛ばす話が来たという。私たちの会社ならお宅の娘さんを、高値で買います。将来を約束しますと。言葉巧みに、そう言ったという。

ベッドの上に散らかる、おとといの客の二千万。

二千万だ。私はたったの二千万で、この色の無い夜の町に身を沈

めることになったのだ。骨の髄まで黒に染まるまで。
あの真っ黒な夜の空を、あれほどにまで恐ろしいと思った日は無かった。抵抗など無駄なことはしなかった。私は馬鹿じゃなかったし、こういう局面で抵抗するほうが馬鹿だと感じたからだ。決してうぬぼれの類ではない。
快楽を、悦楽を。少しずつ、あのマスターは知識とともに身体に馴染ませていった。数週間をかけて、ゆっくりと。
この界隈で私を知らない娼婦はいない。なんたって、今じゃすっかり落ちちゃってトップ。元歌姫といえど、枕ふたつ並べてやることもさすがお手の物なのね。そう囃し立てるやつらもいた。
十センチのヒールに足を通して、綺麗に歩くマネを鏡の前でしてみる。
前はこうやって私が歩き、踊れば拍手も花束も飛んできたのに。
今じゃ、飛んでくるのは噎せ返る紫煙と、札束よ。落ちたものね。そう嘲笑っても、意味もないのに。
「リン」
「はい」
「お客様よ。今日はとびっきりの上客」
「分かりました」
鮮やかな色のイブニングドレスに身を包む。翡翠色の背中の広く開いた、ドレスは夜に映える。相手の服装だって邪魔はしないし、この上なく上品に包める。
長く艶やかな黒い髪を、赤い宝石の散りばめられた美しい装飾品でまとめる。
赤く艶やかなルージュをひいて。目の周りをまるでクレオパトラのように、縁取る。
夜にはそれで十分映える。あまり彩らなくていい。結局は闇に溶けて、分からなくなってしまうのだから。
「早くしなさいよ」
下の階からの声に、慌しくポーチを手に取る。まるでパーティバ

ックのような、小さな鞄。入れるものなど知れている。
黒のショールを肩にかけて、高いヒールに足を通す。
足早に降りて、そのままロビーに向った。
気違いな色の、カクテルに口をつけている、ひげをたくわえたお洒落な紳士。育ちのいいのが分かる。この男は初対面かもしれない。
私と目が合うと、その紳士は微笑んでそっと手を差し伸べてきた。
「こんにちは、レディー」
「こんにちは」
「ああ、思ったよりも上玉だ・・・名前は、リンというのかな」
「ええ。おじさまは？」
「わたしはロイ＝マゼンダ」
「ロイさんね」
「いいや、ロイで構わないよ」
微笑む紳士は、どこか影のあるような深海のような、不思議な人だった。
惹かれていくような、そんな錯覚を今宵も味わう。
「行きましょうか、ロイ」
ヒールを強く鳴らして、そのまま歩き出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2538ba/

愛獣―AIJU―

2012年1月6日19時50分発行